

「さとり世代」に対する戦略的道德教育の検討

藤川 大祐

千葉大学大学教育学部

道德教育の改善・充実をはかるためには、学習者の世代論をふまえた検討が必要である。現在中学生から 20 代半ばの「さとり世代」と、その親である「新人類」世代の背景を検討すると、効果的な道德教育を行うことが困難であることがわかる。しかしながら、さとり世代に対する戦略的な道德教育として、地域共同体の変化によって消滅した「世間」を職業人としての大人とのふれあいによって再構築するという方向と、正義は得となり不正義は損になるという功利主義的な論理を扱うという方向が可能であることが示された。

キーワード：道德教育、さとり世代、新人類世代、世間、功利主義

1. 道德教育と世代的背景

1.1. 議論される道德教育の改善・充実策

2012 年に政権交代がなされ第二次安倍晋三内閣が発足して以降、道德教育の充実をめぐる議論が活発になされるようになってきた。

たとえば、首相のもとに設けられた教育再生実行会議は、2013 年 2 月 26 日に第一次提言「いじめ問題等への対応について」¹の中で、「道德を新たな枠組みによって教科化し、人間性に深く迫る教育を行う」として、道德教育の「抜本的な充実」を提言している。この提言の中では、「全ての教員が習得できる心に届く指導方法を開発し、普及すること」等が求められている。

この提言を受け、文部科学省は「道德教育の充実に関する懇談会」を設けた。この懇談会は、2013 年 12 月 26 日に「今後の道德教育の改善・充実方策について（報告）」（以下、「報告」とする）を提出している²。この報告でも、現状の道德教育には課題があり、今後の社会における道德教育の重要性をふまえて、「特別の教科 道德」（仮称）への変更を含む道德教育の充実・改善を求めている。

報告は「児童生徒の現状を踏まえ、さらには今後の社会において特に重要と考えられる内容の示し方について特に留意する必要がある」としており、社会の変化に対応した道德教育のあり方が検討されるべきことが示唆されている。

このように社会の変化に対応して道德教育のあり方が検討されることは、重要なことである。いかなる社会、

時代においても通用する道德性を想定できないわけではないが、社会の変化とともに強く求められることは多い。典型的には、インターネットが普及したために、情報モラルと呼ばれる新たな考え方が求められるようになってきている。

報告は、特に重視すべき内容として以下の内容を例示している。

- ・ いじめの防止や生命の尊重
- ・ 困難に屈しない心、自律心
- ・ 家族や集団の一員としての自覚
- ・ 多様な人々が共に生きていく上で必要な相互尊重のルールやマナー、法の意義を理解して守ること
- ・ 社会を構成する一員としての主体的な生き方
- ・ グローバル社会の中での我が国の伝統文化といったアイデンティティに関する内容や国際社会とのかかわり

これらは、グローバル化し高度情報化する社会において重要な要素であると言える。こうした内容を扱うことが提案されていることは重要である。

また、報告は、道德教育の指導方法についても改善を求めている。たとえば、学年が上がるにつれ、主人公の心情を単純に理解させる授業でなく、「善悪の問題も立場によって見方が異なる場合もあること」や「自分の思うようにならない複雑で困難な状況に遭遇したときにどのように対応すべきか」といったことを扱うべきことが述べられている。こうした指導方法についての検討も必要である。

Daisuke FUJIKAWA : How we can do Moral Education to "Satori" Generation?
Faculty of Education, Chiba University

報告のこうした議論と、「特別の教科 道徳」(仮称)への変更との間には飛躍があると思われるが、本稿ではこの点について論じることは控え、社会の変化に対応した道徳教育のあり方について、報告とは異なる観点から検討したい。

1.2. 世代論をふまえた検討の必要性

児童生徒が道徳性を習得するのは、学校における道徳教育によってのみではない。むしろ、他で学ぶことのほうが大きく、学校における道徳教育がすべきことは他で学んだことの修正であろうと考えられる。

具体的に考えよう。近年社会問題となっていることの一つに、若者によるインターネットでの不適切な投稿がある。たとえば、コンビニエンスストアでアルバイトをしている若者が、アイスクリームケースに入った状態の写真をインターネットで公開し、非難されるという事例があった³。

この事例をもって、当該の若者の道徳性が低いと評することは容易である。この若者は、職業的責任も衛生管理意識も情報発信の際の責任も自覚していないように思える。このように道徳性が低い若者が多いのであれば、そうした若者にならないように、子どもたちに道徳性を高めるような教育が必要だ、ということになる。

だが、こうした若者については、別の見方が可能である。すなわち、こうした若者は、自分たちなりの道徳性をもっており、そうした道徳性ゆえに不適切な行動をとってしまったと考えることが可能である。

まず、ある種の若者集団においては、大人社会の規範に対して反抗することが歓迎されがちである。アイスクリームボックスに入ることが大人社会の規範に反するからこそ、ある種の若者集団においては歓迎されることとなる可能性がある。すなわち、規範に反した行為をすれば、集団内で「ウケる」と考えられる。逆に、アイスクリームボックスに入る者を止めようとするれば、「マジメか!」と非難されることになりかねない。

そして、多くの若者にとって、内輪の集団内での評価は、より広い社会における評価より優先されるべきことと感ぜられる。内輪の集団内での評価は集団内での自らの処遇に直結するが、より広い社会における評価は気にしなければ済んでしまうように思われるはずだ⁴。

こうした若者は、一見道徳性が低い者と思われるかもしれない。しかし、こうした者たちは内輪の集団内で、その集団なりの規範を学び、道徳性を身につけてきたとも言える。

このように考えると、道徳教育は、学習者の世代的特徴をとらえ、戦略的になされなければならないことがわかるであろう。若い世代の特徴をとらえ、その世代に対する戦略的な道徳教育のあり方が検討される必要があ

る。すなわち、世代論を踏まえた道徳教育の検討が必要なのである。

世代論を踏まえた道徳教育の検討と呼べる議論は、非常に少ない。浅川(2013)は、大学の教職課程「道徳教育論」向けの最近の市販のテキスト7冊を分析し、「子どもの生活世界と道徳」に分類できる記述が少ないことを指摘している。浅川はこれらのテキストを評して、「これらの道徳教育論では児童・生徒を彼らの生活環境・生活体験のもとでの『道徳的主体』として理解することが全くない」と言う。浅川はこうした状況を踏まえて、「現在の学校を建設的に批判するスタンス」からの取り組みが必要だということを示唆しているが、子どもの世代的背景に踏み込んだ議論は行っていない。

世代論と道徳に関係しうる議論としては、岡田(2013)による道徳論がある。これは、学校での道徳教育について直接論じているものではなく、大人までを含め、「抜き差しならないこの国の難題に対し、『道徳』がどんな力を持ち得るのか」を検討したものである。岡田は、古市憲寿、小林よしのり、開沼博、東浩紀らとの対話を行い、宗教がなく、自由と平等の間で「ヘトヘト」になっている現代の日本人には、損得勘定で道徳を説明する「倫理経済学」が「道徳的に振る舞うための処方箋」であると指摘する。岡田は世代論をうたってはいないものの、この議論は世代論を踏まえて道徳教育を考えるための示唆を与えるものと言える。

本稿では、岡田の議論を参照しつつ、特に「さとり世代」と呼ばれる世代の特徴に着目し、戦略的な道徳教育のあり方について考察する。

2. 新人類世代とさとり世代

2.1. 親としての新人類世代

本稿では、2014年現在中学生から20代前半くらいの世代に特に注目する。今後の道徳教育のあり方を考える上では、現在小学生以下の世代について検討する必要があるが、現時点でそうした世代の特徴を考察するには材料が少なすぎる。このため、特徴の考察がしやすい少し上の世代に着目することとする。

現在の中学生から20代前半くらいまでの世代は、最近では「さとり世代」⁵と呼ばれる。さとり世代とは、1980年代半ば以降に生まれ、2002年度から2010年くらいのいわゆる「ゆとり教育」を受けて育ち、経済活動や恋愛に淡泊とされる世代である。「ゆとり教育」と、「悟り」からこうした呼称が使われるようになった。

さとり世代については、マーケティングや若者論の文脈ですでにさまざまな議論があるが、特に教育に関して考えるためにはこの世代の親の世代について検討することが必要である。

さとり世代の親の中心世代は、「新人類」と呼ばれる1960～65年生まれを中心とした世代である。この新人類世代は、非常に特徴的な世代と言える。新人類世代の歩みをたどってみよう⁶。

新人類世代が誕生したのは、太平洋戦争終戦から日本が復興を果たし、高度経済成長が始まった頃であった。1964年の東京オリンピックに合わせて交通網が整備され、テレビや自動車が家庭に普及した。他方で、大学紛争等の社会運動は70年安保で落ち着きを見せ、若者の意識は政治から経済的な豊かさへと移行していく。

新人類世代の幼少期に、テレビが普及し、「サザエさん」「ウルトラマン」「仮面ライダー」「ドラえもん」といった現在まで続く子ども向け人気番組が続々と誕生する。漫画雑誌も人気を博し、子どもがエンターテインメントを享受するようになっていく。他方で、地方から都市への人口移動を背景に地方でも都市でも地域共同体のあり方は変化し、子どもが地域の多くの人と関わりながら成長する環境がなくなっていく。

新人類世代の青春期はバブル経済と重なっており、個人の経済的な豊かさが幸せだとする考え方が支配的になっていく。新人類世代の親にあたる世代は戦前生まれであり、男女役割分業意識は強く、娘には条件のよい相手と結婚して家を守ることが幸せであるという価値観を伝えてきた。新人類世代は恋愛や結婚への意識は強く、バブル経済の中で、テーマパークでのデート、クリスマスの恋愛行事化等、恋愛の経済化とも言える事態が進行した。バブル経済の中で就職活動は完全に売り手市場であり、就職活動でも苦労は少なかったとされる。

だが、1990年代に入り、バブル経済が崩壊すると、状況は一変する。個人の経済的な豊かさが幸せだと考えるならば、一部のいわゆる「勝ち組」を除いて、多くの人たちは期待したほど幸せにはなっていない。男女役割分業意識が強いことに加えて男性の労働時間が概して長いことから、子どものいる夫婦では家事・育児の負担のほとんど妻が担うことになる。地域共同体のつながりは希薄になり、孤独に子育てに向かう妻が増えていると考えられる。

2.2 「新人類ジュニア」としてのさとり世代の特徴

では、こうした親のもとで育ったさとり世代の者たちには、どのような特徴があると考えられるであろうか。

第一に、大人との関わりが少ない。親である新人類世代の段階ですでに地域共同体の崩壊が見られており、その子どもの世代では地域で異年齢の人たちと関わる機会はかなり限定される。親や教師以外の大人と話す経験は限られ、大人とかかわる際のマナーを習得したり、憧れの大人を身近な目標としたり、大人とのコミュニケーションによって承認欲求を満たされたりすることが難

しい。同世代の内輪集団の中で過ごすことが多く、集団の中の「空気」を読むことが優先され、傷つくことが忌避される。

第二に、利己的であり、社会貢献意識は低い。個人の経済的な豊かさを求めてきた新人類の親たちは、我が子に対して、「あなたのために勉強しなさい」とは言っても、「社会に貢献するために勉強しなさい」とは言わない。コンビニエンスストアやショッピングセンター、さらにはインターネットでの消費生活でのみ広い社会と関わっている子どもたちには、自らが社会の担い手となって社会に貢献するという意識をもつことは難しい。

第三に、学校を効率よく終えるべきものとしてとらえがちであり、学校で自らにとって切実なことがらを学ぶという意識をもちづらい⁸。親の世代からさまざまなメディアが享受されており、現在の若い世代はゲームやインターネットを含め多様なメディアに囲まれている。また、親の世代からいじめや不登校、校内暴力といった問題が社会的に注目され、親たちも学校や教師たちを尊敬することが少なくなっており、子どもたちも学校で教えてもらう内容を尊重することが難しくなっている。学校は、最小の努力で一定の成績を獲得して「よい学校」や「よい会社」に進むための手段とみなされがちである。

以上をまとめれば、現代の若い世代は、地域でさまざまな規範を習得することが期待できず、基本的に利己的であって、学校での学習には消極的と考えられる。こうした子どもたちに対して、学校で効果的な道德教育を行うことは、容易ではない。世代論をふまえた戦略的な道德教育を検討することが必要である。

3. さとり世代に対する道德教育の戦略

3.1 大人とのふれあいによる「世間」の再構築

では、さとり世代に対する道德教育はどのようになされればよいであろうか。

そもそも、日本社会において道德の基盤は、世間に対する恥の感覚であったと考えられる⁹。何らかの宗教が支配的な社会であれば、道德の基盤を信仰に求めることは可能である。しかし、岡田も指摘しているように、日本社会には、道德の基盤となるような宗教はない。日本の伝統的な考え方は、万物に神が宿るというアニミズムであり、神は絶対ではなく、道德の基盤とはなりえない。その代わりに、日本では世間に対する恥の感覚が道德の基盤として機能してきた。

1970年頃まで、親の子どもに対するしつけには、「世間様に恥ずかしくないようにしなければならぬ」という論理が用いられることが多かった。大人たちが形成する曖昧な世間が認めるか否かが、しつけの根拠となっていたのである。変化があまり激しくない地域共同体の内

部においては、世間による判断は安定しており、世間は基本的に一枚岩であったので、若者は世間に抗うことは難しかった。世間の考え方を受け入れることで、若者は地域共同体で求められる道徳性を身につけることができたと考えられる。

現状では、地域共同体における世間はほとんど力をもっていない。大人たちの価値観が多様化し、子どもに対して一枚岩でいることは不可能になりつつある。挨拶をするかどうか、好き嫌いや夜更かしが許されるかどうかなど、考え方は人によって異なっており、たとえ挨拶をしない若者がいても、「世間様に恥ずかしい」と言うことは難しい。

他方、若者たちは、世間の代わりに内輪の集団で受け入れられることを重要とみなし、集団の中で浮かぬように配慮している。言わば、準拠する集団が異なるだけであって、自分が所属する集団の規範に従おうとしている点において違いはない。

こうしたことから、内輪の集団に対抗しうるような新たな世間を再構築することができれば、その世間の規範を若者に習得させることが可能となることが示唆される。

地域共同体において大人は一枚岩とは考えにくい、職業人として相互に関わる際、現在でも大人はかなりの程度一枚岩である。職業で関わる相手に対して、大人は一定のビジネスマナーを身につけ、原則として相手に失礼のないように振る舞う。そして、他の組織の人に対して多くの人は基本的に寛容であり、相手に多少の失敗や失礼があっても感情を荒立てることはしない。利己的にふるまうことは忌避され、顧客や同僚などの要求に応えることを目指して働く。このように、職業人としての大人は、かなりの程度、一枚岩と言える。もちろん、職業人としてでなくとも、地域ボランティア等の立場でも、大人はある程度は一枚岩と言えよう。

このことから、職業人としての大人の共同体に何らかの形で参加することができれば、大人の共同体が世間として機能し、若者が道徳性を身につけることにつながると考えられる。総合的な学習の時間やキャリア教育といった文脈で子どもが頻繁に大人たちとふれあい、大人の考え方やマナーを身につけていくことが、道徳教育として重要と考えられる。¹⁰

大人とのふれあいを重ねることには、副次的な効果も期待できる。それは、大人から自らの存在が認められる経験が重ねられ、認められたいという欲求（承認欲求）が満たされることである。大人とのふれあいが少ない者たちは、承認の供給不足の状況に陥りやすいと考えられる。承認を得ようとして逸脱行為に走る者もいれば、承認が得られないために自尊感情を高めることができず、傷つくことを恐れて大胆な挑戦ができない者もいるで

あろう。大人とのふれあいによって承認欲求が満たされれば、逸脱行為に走ることの抑止につながったり、自尊感情をもって大胆な挑戦ができるようになったりすることが期待できる。

別の副次的効果として、魅力ある大人を具体的な目標とすることができるということがある。たとえば、子育てと仕事を両立して生き生きと生活している女性の姿は、若い女性にとって憧れとなりうる。憧れの人の態度を真似ようとすることで、道徳性が高められることが考えられる。

このように、職業人を中心とした大人たちとふれあい、そうした大人たちが世間として機能するようにすることで、若い世代に対する有効な道徳教育を進めることが可能となると考えられる。

3.2. 功利主義的な論理による根拠づけ

だが、職業人としての大人たちに頼る道徳教育には、限界がある。職業人としての大人の中には、組織防衛や保身のために不正行為を行ったり、消費者を欺いたり、問題に気づいても対応しなかったりすることがある。若者が世間に合わせることしか学ばないとしたら、周囲の問題ある態度に合わせ、自らも問題ある態度をとることになりかねない。世間に合わせようとするだけでなく、世間を批判的にとらえ、世間の流れを変えようとするようになることもまた、必要である。

こうしたことのためには、他者の心情に共感させるような道徳教育は無力である。結局は不正義は損であるという功利主義的な論理¹¹を扱う道徳教育が求められる。これは、岡田が主張する「倫理経済学」に訴える道徳と同様の考え方である。しかし、岡田は「倫理経済学」についてあまり具体的には論じていないので、以下は岡田の議論から離れ、功利主義的な論理を扱う道徳教育がどのようなものとして成立しうるかを検討していこう。

功利主義的な論理を扱う道徳教育が可能となるためには、正義は得であり不正義は損であるという利得構造が、社会の中でかなり強く成立していることが必要である。「無理が通れば道理引込む」と言われるように、正義が損をする状況が広がってしまえば、功利主義的な論理は通用しない。幸いなことに、現代の日本社会では不正義がはびこるような状況とは考えにくく、インターネット社会の進展によって不正義は社会的制裁を浴びるリスクが高まっており、ますます不正義は損をする利得構造¹²が強化されていると言える。

たとえば、隠蔽や事なかれ主義について考えよう。不正行為であっても、バレなければよい、なかったことにすればよいといった考え方から不正行為がなされ隠蔽されることは、ありうる。この「バレなければよい」という考え方を、不正義だと断じることはたやすい。しか

し、周囲の人の空気を読むことばかり覚えていた人が不正義だからと態度を変えることを期待することは難しい。功利主義的に、「バレなければよいという態度は、結局は損である」と考えることでしか、態度は変わりにくいであろう。高度情報社会となった現在、不正行為を隠蔽することは難しく、いったん隠蔽が露わになったら強い社会的制裁を受けやすくなっている。実際に、不正行為を隠蔽しきれずに強い社会的制裁を受けている例に学び、「バレなければよいという態度は、結局は損である」ということを学ぶことは可能であろう。

同様のことは、次のようなことがらについても言える。

- ・ 利己的な態度をとる人は応援されにくく、利他的な態度をとる人は応援されやすい。このため、利他的な態度をとりつづけられる人はそうでない人より、結果的に個人的な利益を得やすい。
- ・ 「ただ乗り」(フリーライダー)が多くなると、社会全体の不利益になる。このため、ただ乗りをする人が多数派にならないようにつとめることは、社会全体の利益にはもちろん個人の利益にもつながる¹³。
- ・ 上司や政府などは必ずしも現場の問題の解決方法を知っているわけではなく、そうした人たちの対応を待つより、現場に近いところで解決に向けた動きをつくるのが問題解決に有効である場合が多い。
- ・ 異質な者や弱い者に冷たい社会は、もろく、生きづらい。同質だから協力するという考え方は、小さな違いが露呈したら社会が崩壊してしまう。異質だから協力するという考え方に依拠した社会は崩壊しにくい。非寛容は、結局は損である。
- ・ 正しいことをしようとしても、他の人の協力は容易には得られない。協力を得るには、努力と工夫が必要となる。努力や工夫なき正義は、結局は損である¹⁴。

損得を道徳性の基盤とすべきでなく、崇高な理念を体得して損得とは無関係に正義を貫けるようにすべきだと考えられるかもしれない。もちろん、現在の若者たちの状況をふまえた上で、そうした理想的な道德教育が実行可能なのであれば、そうした教育が追求されるべきであろう。

だが、そうした道德教育を効果的に実現する方法がさしあたり見つからないのであれば、損得に訴える功利主義的な道德教育を戦略的に採用することが考えられてよいであろう。

4. おわりに

本稿では、さとり世代を想定した道德教育のあり方として、職業人としての大人によって「世間」を再構築するという方向と、功利主義的な論理で損得に訴えるという方向の二つのあり方を提案した。これらを組み合わせることでカリキュラムを構築することで、さとり世代はもちろん、より若い世代に対しても、世代論をふまえた戦略的な道德教育を構築することができると考えられる。今後、こうした方向での授業実践開発を進めていく必要がある。

ここで提案した二つのあり方は、ともに社会がある程度望ましい状況であることを前提としていることに注意する必要がある。職業人としての大人が子どもたちが準拠しても大きな問題がない程度に望ましい状況でなければ、そこに「世間」を再構築して道德教育を行うわけにはいかない。正義が得をし不正義は損をするということがかなりの程度言える社会でなければ、功利主義的な論理に訴えることはできない。いずれにしても、戦略的な道德教育は社会のあり方に依存する。絶対的な神の支配のない日本においては、道德教育の基盤はいずれにしても社会に求めざるをえないのである。

¹ http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaicei/pdf/dai1_1.pdf (最終閲覧日 2013 年 12 月 25 日)

² http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/096/houkoku/_icsFiles/afiedfile/2013/12/27/1343013_01.pdf (最終閲覧日 2014 年 2 月 6 日)

³ この問題についての「お詫びとお知らせ」が以下に掲載されている。http://www.lawson.co.jp/emergency/detail/detail_78348.html (最終閲覧日 2013 年 12 月 25 日)

⁴ こうした問題については、「うちのコミュニケーション」として、藤川 (2008) で論じた。

⁵ 「さとり世代」については、原田 (2013) 等参照。

⁶ 新人類世代については、藤川 (1998) で検討している。

⁷ 子どもたちに「利他的な夢」を描かせることの重要性について、藤川 (2006) で論じている。

⁸ 内田 (2008) 参照。

⁹ 日本社会論の古典である Benedict (1946) でも論じられている。

¹⁰ こうした発想でのキャリア教育については、藤川 (2006) で論じている。

¹¹ 功利主義 (Utilitarianism) とは、ある行為についての価値判断を、その結果生じる効用の総体によって判断する考え方である。加藤 (1995) など参照。

¹² 利得構造という考え方の教育への活用については、藤川 (2012) で論じた。

¹³ 山岸 (2000) 参照。

¹⁴ 藤木 (2008) 参照。

参考文献

浅川和幸 (2013)、道德教育論を考える、北海道大学大学院教

育学研究院紀要、第119号、pp.27-50

- Benedict, R (1946), *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, Houghton Mifflin. (長谷川松治訳、菊と刀、社会思想社、1948年)
- 藤木太郎 (2008)、協力的行動を取らせる態度を育てる道徳授業の開発、授業実践開発研究第1巻、pp.81-89
- 藤川大祐 (1998)、ディベートで学校はよみがえる、学事出版
- 藤川大祐 (2006)、企業とつくるキャリア教育 (藤川大祐編、NPO 法人企業教育研究会著)、教育同人社
- 藤川大祐 (2008)、ケータイ世界の子どもたち、講談社
- 藤川大祐 (2012)、学級経営と利得構造-学級経営研究のための試論-、授業実践開発研究第5巻、pp.1-5
- 加藤尚武 (1995)、応用倫理学のすすめ、丸善出版
- 原田曜平 (2013)、さとり世代、角川書店
- 岡田斗司夫 (2013)、僕らの新しい道徳、朝日新聞出版
- 内田樹 (2008)、街場の教育論、ミシマ社
- 山岸俊男 (2000)、社会的ジレンマ、PHP 研究所